

目 次

土屋小学校

1. 避難訓練から読み取る時代の変化	小林 将人	91
2. 教えることの難しさ	堤坂 幸貴	92
3. 生徒中心の授業	中村 栞李	92
4. 児童との触れ合いのなかで	稲葉 沙樹	94
5. 程よいサポートの大切さ・見守る大切さ	川尻 みほ	94
6. 小学生に算数を教えるということ	入谷 詩子	95
7. 小さな配慮	望月 美里	96

土沢中学校

8. 国語力と数学力	水戸 紘子	98
9. ひとつの授業ができるまで	猪川 雄斗	99
10. 生徒目線、教師目線	大工原史晃	99
11. 学習する環境の設計	永井 雄大	100
12. 理科教員の苦労	柳澤 貴大	101
13. 生徒と接していく上での容姿の大切さ	佐々木一樹	102
14. 教師の仕事・教え方の工夫	高橋 雄亮	103
15. 教師であるということは	大島 清仁	104

16. 教え方は十人十色	福本 健志	105
17. 当たり前のことを当たり前に思っていない	綾部 裕太	106
18. 学校における工夫と準備	小倉 龍馬	106
19. 信頼関係の形成	松島 花	107
20. ボランティアを通して得たことと課題	加藤 理道	108
21. 「先生」としてのコミュニケーション	篠原 維	109
22. 生徒とよりよい関係を築く	滝沢 仁基	110
23. ボランティアを通して気づき, 学べたこと	柴倉 愛理	111
24. 集団授業の難しさ	石山 実玖	111

土沢中学校・秦野曾屋高等学校

25. 生徒の表情からわかること	中尾 真穂	113
26. 理想と現実のギャップ	丸山彩恵子	114

土 屋 小 学 校

1. 避難訓練から読み取る時代の変化

生物科学科 科目等履修生 小林 将人

学校ボランティアの活動は基本的に二つに分類される。一つは授業に入り担任の先生の手伝いとして机間指導やプリントの丸付けなどをする活動。もう一つは校務の先生とともに校内の整備を行う活動である。以上が学校ボランティアの基本的な活動だが、ボランティアに入るタイミングによっては学校全体で行う特別活動に立ち会うこともできる。

今回の学校ボランティアで、私は避難訓練に立ち会う機会に恵まれた。しかし、その訓練は私が小学校時代に経験したものとは決定的に異なるものであった。そして、その訓練から昔と今の教育現場（社会環境）の変化について考えさせられた。

周知のとおり、避難訓練とは普段と異なる特殊な状況下において、自分の命を守るために行う訓練である。当然、訓練では「普段と異なる特殊な状況」が想定され、その状況に適切に対処するよう訓練が行われる。想定される「普段と異なる特殊な状況」として「地震」と「火事」が挙げられる。この二つを想定した避難訓練は誰もが経験することであり、学校をはじめ企業でも定期的に行われる。また、私は経験したことはないが、海岸沿いの学校なら「津波」を想定した避難訓練も行われるであろう。

しかし、今回小学校で行われた避難訓練は「地震」や「火事」を想定したものではない。また、「津波」を想定したものでもない（そもそも土屋小は地理的に津波の心配をする必要はない）。今回想定された「普段と異なる特殊な状況」とは、『不審者の侵入』である。『不審者』が想定された避難訓練を私はここで初めて経験することとなった。

『不審者避難訓練』には地震や火事を想定した避難訓練とは異なる特徴を多く見ることができた。例えば、避難訓練にはつきものの「お・か・し・も」。この『し』に、不審者を想定した特徴がみられた。当然ながら、『お』は「押さない」、『か』は「駆けない」、『も』は「戻らない」である。『し』は地震や火事を想定した避難訓練では「喋らない」である。不審者を想定したこの避難訓練でも「喋らない」はもちろん当てはまるが、『し』にはもう一つ、「静かに」という意味があった。喋らないことで不審者にこちらの位置情報を与えず、そうして、静かにすることで周囲の状況を的確に判断し、避難する。校舎から避難した後の対応も、地震や火事を想定したものと不審者を想定したもので違いがみられた。地震や火事を想定した訓練では、校舎から出た後に校庭の中央に集合していた。しかし、不審者避難訓練では不審者が校舎外に出て追ってくることを想定し、校外にすぐに逃げられるように門の近くに集合するようにしていた。また、教職員は教室掃除用の長い箒や椅子など、不審者に対抗するための何かしらを持った上で、児童を誘導していた。

私がこれまで経験した避難訓練は小・中・高・大学時代を通して地震や火事（炎）といった「自然的脅威」に対するものであった。しかし、2001年6月8日に起きた附属池田小事件をはじめ学校に不審者が侵入するという事件が起きるようになり、「人的脅威」に対する訓練も必要になったと考えられる。文部科学省も『学校への不審者侵入時の危機管理マニュアル』を公開している。

今までの経験により、教職員には地震や火事（炎）といった「自然的脅威」に対する心構えや知識が必要であり、そして児童の安全を守る責任があると感じていた。また、今回のボランティアの経験から、それらの他に不審者による「人的脅威」から児童を保護する覚悟と勇気が必要であること、そして教職員同士の連携の重要性を学んだ。

2. 教えることの難しさ

情報科学科 4年 堤坂 幸貴

学校ボランティア演習として、土屋小学校で5月から7月まで活動させてもらった。活動内容は主に授業のサポートで、時々それ以外にも運動会の手伝い、校外に出ての伐採活動、地図作りなどの雑務も行った。授業は算数や体育のサポートをすることが多く、ただ見守るだけで授業が終わってしまうこともあった。しかし、それでも問題の答え合わせや問題が解けない児童に対しては解法を導いてあげるなど、授業を通して児童と多く関わった。授業以外でも、休み時間は児童と一緒に遊んで遊び、給食の時間では様々な話をし、たくさんの交流を図ることができた。

今回の活動を通して、教えることの難しさというものを感じた。単純に教えると言っても、「相手に理解させる」といったことだけでなく、どこまで教えるべきかの見極めや児童の考えを引き出すようなアドバイスの出し方など、考えさせられることが多くあった。

例えば算数の授業で、問題が解けない児童がいた。ヒントを与えようと声をかけたところ、「全然分かんない」と言うばかりで、こちらの言うことに聞く耳を持ってくれなかった。その児童は問題を解く気が失せてしまっていたらしく、こちらとしてもお手上げ状態だった。こういう場合、教える側として、どのように対応すればいいのか分からず、とても苦勞した。また、自分の意見をはっきりと言えないようなおとなしい子の場合だと、こちらの言うことにいま一つ分かりやすい反応を見せてくれず、本当に理解できているのか心配になるときもあった。

国語の授業では、児童に作文を書かせることがあった。自由作文だったが、児童に「この続きに何を書けばいい?」と聞かれたとき、言葉に詰まってしまった。単純にこちらが考えた文章をそのまま書かせても意味がないだろうし、

児童がどんな経験をしてどんなことを思ったのかが分からないので、何と答えればいいのか分からなかった。解法が決まっている算数と違って表現の仕方がいくらでもあるような問題は、児童の立場となって考えるなどして工夫が必要だと感じた。

また、児童と砂場で遊ぶ機会があった。砂の山を作ることになったとき、こうすれば山がもっと高くできるとか、形を整えるにはこうしたらいいとか、何か意見を出そうとも思った。しかし、一生懸命に試行錯誤しながら山を作っている児童を見ていると、意見を言うことにためらいを感じた。ここで何か意見を出したら児童の発想の邪魔になるのではないかと、児童のためにならないのではないかと考えた。このようなところにこそ教えることの難しさを感じる。

こちらの言葉が児童にとってどのような影響を与えるかを考えると、どうしても慎重になってしまう。自分にとっては何気ない一言であっても、子どもにとっては忘れられない一言になるかもしれない。そのため、無責任な発言はできないと強く思う。もっとうまく児童と交流していくためには、より多くの経験を積む必要があると感じた。このボランティア活動は、その第一歩として、とても貴重な体験だったと思う。この経験をしっかりと次に活かしたい。

3. 生徒中心の授業

情報科学科 4年 中村 栗李

5月から7月の水曜日と木曜日の週2日、2時間目の始まる9時半から下校時間の15時半まで土屋小学校で学校ボランティアをさせていただきました。1日の主な活動内容は毎回訪問時に教頭先生より、採点や体育の授業の監視などの授業補助、また運動会や音楽発表会などの行事が行われていたため、練習にも参加するよう言われました。

私は教職の授業を履修する上で模擬授業を行うのですが、教師を目指している理由が“教えることが得意だから”ということではないので、人に教えるということは想像していたより難しいと感じました。今まで数回授業を行いました、私が思うような授業というものを作れていませんでした。今回ボランティアに参加した理由も“先生方がどのような授業を行っているか”を観ることが目的のひとつで、数名の先生の授業に参加させてもらいました。しかし、実際に私が行う授業で活かせることがあったか考えると、はっきりとした答えは出せず、何を得られたのか曖昧でした。

ボランティア期間中に大学の授業で模擬授業をする機会がありました。私は普段通り指導案や板書案などの授業の構想を練っていると、それまでとは異なる自分自身の考え方の変化にふと気づきました。以前の私は、指導案は提出3日前から作成を開始し、板書計画に関しては無いに等しく、実際に黒板を使つての事前の授業構成などしたことがありませんでした。そのため、新しい単元をどのように習得させるかに手一杯で、重要な部分だけを説明して生徒役の学生の考えを引き出すという発想は全くありませんでした。しかし、そんな私が模擬授業の1週間前までには指導案、板書計画、そして授業構成を作り終え、なにより“生徒中心の授業”を作ろうと心がけるようになりました。「児童が自ら意見を発せられ、教える側も児童は何がわからないのかを学べる授業を作りたい。」—何が自分にそのような変化を与えたのか改めてじっくり考えてみると、ボランティアで観たある先生の授業に自然と影響されているのではないかということに気付きました。

算数の授業でのこと、その先生は基本的に指導書を見ず、授業開始後黒板に身体を向けると数十秒悩んでから問題を板書していきます。その問題の内容も教科書に載っているものではなく、明らかに児童の身近にある想像しやすいもので、また多少算数に関係のないエピソードも

織り交ぜて常に児童の関心が先生の発言に向くような授業を行っていました。そのような授業なので、ほぼクラス全員が我先にと発言していました。そのため、授業スピードが遅れてしまうのではないかと気にしながら何度かその先生の授業を拝見させていただきました。しかし、1単元を1回の授業で終えているようで、その1回でどれだけ印象づけ、内容を習得させるかの工夫が毎授業で観られました。実際に私も模擬授業で生徒の発言を聞くことのできるような授業展開をしたところ、生徒側の視点から見える疑問点を教師側からも見つけることができました。しかし、児童の発言が増えるということはその発言をまとめる力量も必要とされ、先生のように与えられた1時間で生徒の意見をまとめ、1単元を終えることは私の授業ではできませんでした。生徒役側の意見としても、「授業自体は生徒が楽しめて、かつ生徒の意見を聞こうとしていてとても良い。でも生徒の発言を聞くことを意識しすぎて、多くの意見が出た時にまとめることがまだまだできていない。」などの指摘を受けました。それは私自身も授業中に感じていたことで、生徒が意気揚々と意見を述べるところまではボランティア先の先生と大差ないとは思えたのですが、なかなかまとめに入ることができず苦悩してしまい、結局その授業はまとめられずに終わってしまいました。今回はこのような結果でしたが、ボランティアで得られたことはとても多く、今後の教師人生の基盤となる貴重な経験をさせていただきました。

たくさんの大切なことを教えてくれた土屋小学校の児童および先生方には本当に感謝しています。3ヶ月間ありがとうございました。

4. 児童との触れ合いのなかで

数理・物理学科 3年 稲葉 沙樹

私は土屋小学校に毎週木曜日に行きました。給食を1年生の教室で児童たちと食べ、昼休み一緒に校庭に出て遊び、そのあとは1年生だけでなく高学年の教室にお邪魔することもありました。基本的には授業の補助ということで、作業が進んでいない児童や困っている児童の手助けをしました。

今回のボランティアを通して、主に児童との触れ合いについて印象深かった出来事を通して感じたことをまとめていきたいと思います。

まず、初めてボランティアに行った日、給食を1年生の教室で食べた後、昼休みはわくわくタイムということで、縦割りグループ対抗のゲームを体育館でしました。ほとんど顔も知らない子たちなので給食の時間も何を話したらいいのかもわからず、昼休みもただ立っているだけという状況でした。しかし、去年土屋小学校のりんどう祭で私がピアノを弾いていたことを覚えてくれている子がいて、「ピアノのお姉さん」と声をかけてくれました。たまたま、りんどう祭のときと同じ格好をしていたことがよかったのかもしれないですが、覚えてくれたことだけでもとても嬉しかったです。それから少し緊張もほぐれて他の児童とも会話ができるようになりました。

授業に入らせていただいたときにすごく思ったのは、児童の発想力です。図工の授業に何度か行きましたが、みんなそれぞれの発想で作品を作り上げていて、ただ木材をボンドや釘でくっつけて組み合わせるだけでも個性が出ていて面白かったです。絵を描くときも何を描いているのか聞くと、「これは〇〇で、こっちは□□」という風にとっても楽しそうに説明してくれる子がたくさんいました。教師側からすると何を表現しているのか理解しがたいこともあると思うのですが、それを否定してしまうのはよく

ないと思います。児童が必死に膨らませた想像を壊さないように対応していくのが教師として大事なことだと思いました。今回のボランティアではありませんが、実際に自分の作品を否定されて自信を無くしてしまった子も、見たことがあります。子どもらしい想像・発想を潰さないように気を付けたいと思いました。

次に、道具を使う際に気をつけなければいけないと思ったことです。1年生の生活科の授業へ行くことが多かったのですが、虫を捕まえるために虫捕り網を持っていくことがありました。柄がとても長く、小学生が持つとふらふらしてしまいます。男の子はふざけて振り回すことが多く、そのたびに危ないからと注意をしていたのですが、長い柄が女の子の顔にぶつかり泣いてしまいました。男の子は小さい声で何回も謝っているのですがまったく許してもらえず…。こういうときの対処をしたことがなかったのでとても困りました。とりあえず男の子にもう一度しっかり謝らせて、女の子を説得し、その時間は終わりました。どう慰めたりなだめたりすれば児童の機嫌をそこなわないのか、私の中で新たな課題が生まれました。ただ、道具を使うときは児童に注意をはらって使い方もしっかりと指導していかないといけないと改めて思いました。当たり前のことかもしれませんが、児童は何をするかわかりません、信じてあげることも大事ですが安全を第一に考えたいです。

今回のボランティアで初めて長い時間小学生と過ごし、小学生の素直さを感じました。実際に現場に入るという貴重な体験ができました。

5. 程よいサポートの大切さ・ 見守る大切さ

情報科学科 3年 川尻 みほ

私は、2014年5月～7月の期間で、平塚市立土屋小学校の小学校ボランティアに参加しました。毎週金曜日の9時30分から13時10分の時

間帯で、計10回の活動でした。活動内容は、2, 3, 4 時間目の授業サポートとして、主に算数や音楽の授業の補助に入ったり、授業見学をしたりしました。また、1年生の教室で児童たちとともに給食を食べ、そのあと一緒に清掃活動をしてきました。5月31日には、小学校の運動会もあったため、運動会もボランティアとして参加してきました。

今回のボランティアを通して、子どもたちを程よくサポートをし、見守ることの大切さを学びました。そして、活動に参加することで、改めて自覚させられることが多く、私にとって当たり前になっていることが、先生側に立つと変わることに気づかされました。

子どもたちを程よくサポートをし、見守ることの大切さを特に考えさせられたのは、運動会の練習の補助をしていた時のことです。運動会のプログラムの中に、高学年の児童による組み体操がありました。その組み体操に出てくる倒立や二人一組で行う技の練習に対し、児童からサポートに入ってほしいと言われたところに行き、近くで見守ったり、足を持ったりなどして支えることを先生方から頼まれました。ただ、私は今にも倒れそうになっていたりする児童を見ると、すぐに支えたくなり、近くに行き、手を差し出してしまうことが多くありました。しかし、児童たちは運動会当日では補助なしで組み体操を行うため、自分たちの力で技を決めなければならないのだと思い、近くで見守り、必要以上にサポートをしてはいけないときもあると考えさせられました。

このことが特に考えさせられた場面でしたが、このほかにも、算数の授業の補助などに入っているとき、最低限のアドバイスを児童に伝え、考えさせる工夫について学んでいかなければならないと感じました。

活動に参加し、授業補助に入っていたときに聞いた先生の言葉から改めて自覚させられたことがあります。算数の授業補助に入っていたときに、「先生の説明を聞くときは、手を膝の上

に置き、姿勢を正して聞きましょう。」とある先生は言っておられました。私たちは普段授業中など先生の話を聞く際は、ペンなどを持ったまま、時折メモを取りつつ話を聞いています。それが普通になりつつあったため、その言葉を聞いた際、小学生にとっては、「今は説明を聞くとき」「今は黒板を写すとき」という区別はきちんと必要なのだということを実感させられました。これらをきちんと小学生のときから区別していくことは、今後大きくなってからも使える能力になっていくと思います。

私は、大学2年の後期から土屋小学校の学校ボランティアに入らせてもらっているので、今回は2度目の参加になりました。継続して活動に参加させてもらっていることで、児童たちにも覚えてもらえ、児童たちと話しをすることがたくさんありました。また、運動会も練習から補助として見せてもらったので、当日に子どもたちの競技を見たら、胸が熱くなり感動しました。

5月から7月というあつという間の3ヶ月の期間でしたが、児童の興味を引く工夫の多い授業の作り方、先生方の児童への話し方など、とても勉強になることが多い3ヶ月でした。この3ヶ月の活動は、日々が充実しており、毎回の活動に行くことが楽しみで、より一層教師になりたいという夢を強くしてくれる体験でした。この活動から得た学びを生かしていけるよう、これからもがんばっていきたいと思います。

6. 小学生に算数を教えるということ

数理・物理学科 2年 入谷 詩子

私は3ヶ月間、土屋小学校でボランティアとして様々な体験をさせていただきました。様々な経験をさせていただいた中でも特に印象に残っているのは3年生と2年生、二つの算数の授業です。

一つ目の3年生の算数では、先生が黒板に円を書き、次のような問題を出しました。

『このまん丸のピザを6人で分けて食べます。平等になるように切りわけてね。』

1人の男の子がこの問題に挑戦しました。

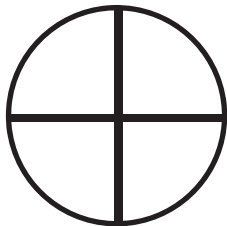


図1

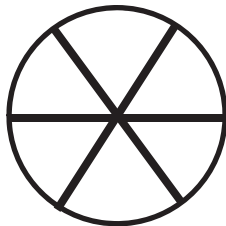


図2

その男の子はまず、黒板に書かれた円の中に十字を書き入れました。(図1) 正解は図2のような形なので、十字を書き入れてしまうと6等分はできません。それを見ていた他の児童が「それじゃ分けられないよ!」、「そこにもう1本線を書けばいいんだよ!」など自分の意見をそれぞれ言い始めました。その後、先生の指示で各自のノートに自分で分け方を考えて書くことになったので私は皆のノートを見て回りました。すると何人かの児童は正解の形図2が書いていましたが、多くの児童は図1のように円の中に十字を書き入れた後どうしたらいいか分からず、手が止まっている状態だったのです。先生から解説があった後も数人は納得できていない様子でした。

二つ目の2年生の算数では、問題にあった答えを出すにはどの式を使うのがいいか?という授業でした。

『花が5本さいています。次の日見たら花は12本になっていました。花は何本ふえたでしょうか?』

という問題に対して児童の意見は大きく分けて次の2つに別れました。

(式1) $5 + 12 = 17$	答え 17本
(式2) $12 - 5 = 7$	答え 7本

「ふえているから足し算になる(式1)」という意見と「ふえた数を知りたいから引き算になる(式2)」という意見です。ふと私の近くに座っていた女の子を見ると、どちらの意見にも納得していない様子でした。声をかけてみると、その女の子は「答えは7なのに式が分からない」と悩んでいたのです。「ふえているから足し算になる」という意見を出した児童は、正解の説明を聞いたあと、自分が間違っていたことに気づいていましたが、その女の子は最後まで納得ができていないようでした。

私たちには今までの学習や経験があるので、これらの問題にすぐ答えることが出来ます。しかし、学校で出てくる問題はほとんどの児童にとっては初めてのもののなので、理解度に合わせた説明が必要なのだということを痛感しました。例として出す問題は難しすぎると児童の苦手意識を高め、やる気を損なってしまいますし、簡単すぎると感覚で答えてしまい、解き方などの知識が身に付きません。ちょうどよい難易度の問題を出すためには、児童をよく観察・理解する必要があります。小学生に算数を教えるということはその児童のことを理解することにつながるのだと思いました。

今回のボランティア活動を通して授業見学以外にも様々な体験をさせていただき、多くのことを学びました。最後に、たくさんの事を教えて下さった土屋小学校の先生方、児童の皆さん、本当にありがとうございました。

7. 小さな配慮

総合理学プログラム 2年 望月 美里

私は5月から7月までの毎週水曜日に11:00から13:10までの計12回、土屋小学校へ学校ボランティアとして参加させていただきました。授業の補助として、算数、体育、音楽、図工、家庭科、総合的な学習の時間という様々な教科

に加えて運動会、給食、掃除の時間にも参加しました。授業では、教室の後ろで見学したり、児童がプリントやワークをやっているときに生徒の机を見て回ったりしました。

どの授業でも共通して行われているのは、児童が自ら考え、発表し、その結果をみんなで考えるということでした。算数では、「どうしてこのような式になるのか」、「なぜこの結果になるのか」や総合的な学習の時間では「どうしてそう思うのか」、「それに対して自分はどう思うのか」というその結果に基づく過程が重要視されていると感じました。

また、学校の児童たちの関係についても驚かされました。人数が少ないというのもあると思いますが、児童全体が学年問わず個々の児童の名前や特徴を知っているということです。私の通学していた小学校では、“たてわり”と呼ばれるものがあり、各学年から一人ずつ選んでグループを作って遊ぶという時間が設けられていました。しかし、その制度では、そのグループでしかあまり関わらないため、人数が多いという理由もあり学校全体の児童の名前など覚えられないものではありませんでした。しかし、土屋小学校の児童たちを見ると、高学年の児童が低学年の児童の面倒を見るということが自然と出来ていたのです。

この二つについて思ったことは、どちらも先生方による日頃の指導の賜物だということでした。先生方の工夫がこのような結果になっていると思いました。

例えば算数では、まず個人で考え、それからなぜこう考えたのかを理由も述べながら発表したり、他の児童にわかるまで説明させたりしていました。理由を上手く言えない低学年の児童には、途中で合いの手を入れ、うまく誘導して答えさせていました。どの児童も自信を持って発表して、時には反対意見も出ることもあり、活気のある授業となっていました。

掃除の時間では、各学年を混ぜたグループを作って掃除をしているので、自然と高学年の児

童が低学年の児童の面倒を見ながら掃除に取り組んでいました。

また、この他にも授業で図や絵を使用したり、分かりやすい言い回しをしたりしていました。教室にも工夫が施されていて、児童が窓から身を乗り出さないように、1番下の窓は、開けさせないようにしたり、身長の高い児童にも黒板が届くように踏み台が用意されていたりしました。各行事にも先生方や地域の皆さまと連携して運営されていて、改めて教師というものは大変だけれど児童の成長が間近で見られるやりがいのある仕事だと感じました。

今回の学校ボランティアで私は、多くのことを学び取らせていただきました。細かな点でも先生方の工夫や配慮があり、こうして学校という組織は作られていくのだと思いました。何かを「教える」、「成長させる」ということに関しては、学校にしても日々の生活にしても共通する部分というのがあると思います。人間を育てるということは、自分もまた成長し続けなければならない、そういったところからも、日々教師を目指す人間として成長していきたいとします。この経験をいつか教壇に立ったとき、生かせるよう努力していきたいと思いました。

最後に、お忙しい中このような貴重な経験をさせていただいた土屋小学校の先生方、児童の皆さんにとっても感謝しております。ありがとうございました。

土 沢 中 学 校

8. 国語力と数学力

情報科学科 4年 水戸 紘子

今学期は放課後学習会を中心に参加させていただいた。中学校前期の数学といえば、数字、文字、計算、方程式など、どの学年も数学の基本的な概念や演算を勉強するととても重要な時期だ。しかし、授業内容や学習内容は前学年の知識や考え方が頻出するため、さほど難しいというものはない。生徒も新しい学年にワクワクしながら毎日過ごしており、数学に対しても非常に意欲的な姿が見られる。

5月上旬、プリントの枚数や計算量は多かったにもかかわらず、ほとんどの生徒が自力で終わらせることができていた。計算ミスが多く何度も何度もやり直している生徒も見られたが、諦めずに最後までやり通していた。また、プリントを早く終わらせられた生徒には、他の生徒に教えるよう誘導することで、本当に困っている生徒を見ることができ、それぞれに深い学習をさせることができた。どの学年でも学習会に来たすべての生徒にとって意味のある時間にすることができたと思う。しばらく経って、それぞれの学年では知識や計算法の授業が終わり、このことを利用する仕方の授業に変わった。すると、学習会のプリントも徐々に利用に関する問題に移り変わっていったわけだが、利用の問題が多くなるにつれてプリントの枚数が減り、その問題量も明らかに少なくなっていった。しかし、プリントを終わらせることができる生徒は少なくなり、当然、教師が生徒一人にかけられる時間も少なくなった。なかにはプリントのどの問題も全くわからず、全て教師に聞いている生徒もいた。これでは学習会の時間がいくらあっても足りないと思い、生徒全員に共通する問題点を考えた。もともと特別難しい計算は要

求されていないため、どの生徒も計算方法がわからないわけではない。プリントをよく見ると、そもそも何も書けていない生徒が多くいることがわかった。そこで、私はその場にいた数人の生徒と全員で意見を出し合い、考え合いながら問題文から計算式を作った。すると、どの生徒も「あーそういうことねー。」と頷きながら残りの計算をスラスラとこなしていった。次の問題も同じように取り組んだ。またしても、「あーそういうことー。」と言って続きを終わらせた。生徒は問題を読む時点でつまづいていたのだ。

国語と数学はよくかけ離れた教科といわれる。実際に国語に計算する必要はなく、数学で文脈から心情を読み取る機会はない。しかし、数学には言葉の意味をしっかりと受け取る力が必要不可欠である。数学を勉強することは世界共通の数式という言葉を学び、それを利用することに他ならないと私は考える。もっと言えば、数学力を高めることは国語力がなければ達成されないのである。私は大学に入り、数学を学び続け、難しさに直面することで、ようやく、国語力の大切さに気づくことができた。そうして気づくことができてから学校ボランティアを何度か行い、新しい発見をすることができた。数学が苦手という生徒は、そのほとんどが文章を読み取れないために苦しんでいるということだ。また、それは国語の教師がどうにかできるものではなく、数学の教師が意識することで変えていくことができると考える。この経験を通して、中学校において、理系と文系を分けて考えることに何の意味もないことだと感じた。むしろわざわざ分けてしまうからこそ、理系教科は難しいものという印象を与えてしまう。特に中学校まではどの教科も関連性があることを頭に入れて、全ての教科に全力を注ぐことが大切である。すべての教科を関連付けて数学を教えていくことは、私にはまだ難しいことだが、少なくとも、数学と国語には素敵な関係があるということをしっかりと伝えていきたい。

9. ひとつの授業ができるまで

化学科 4年 猪川 雄斗

5月の毎週木曜日に土沢中学校で学校ボランティアとして活動させていただきました。前回の土屋小学校でのボランティアとは違い、今回は理科に特化して、授業補助や実験準備のお手伝いをしました。

私はこの4日間の活動を通して、ひとつの授業は先生方が生徒のことを考え沢山の工夫の上で成り立っていること、いわば授業の裏の部分を知ることができました。また、授業補助では生徒との関わり方についての発見がありました。今回のレポートでは、私が活動を通して強く感じたこの二点について詳しく書かせていただきます。

① ひとつの授業ができるまで

2年生が台車を用いて等加速度運動の実験をするということで、実験準備のお手伝いをさせていただきました。どれくらいの斜面を作ったら良い記録が出るのか、どのバネ測りが適しているのかを試行錯誤を重ね、1時間以上に及ぶ取り組みの後、実験器具、方法が決まりました。そして放課後は生徒の実態に合わせた授業プリントを作成すると聞きました。私は教科教育法Ⅲ・Ⅳで実験を取り扱った模擬授業を行ってきたので実験前の準備の大変さは理解していたのですが、教師になって10年を超えるベテランと呼ばれる先生方が自分たちと同じかそれ以上に授業準備に取り組んでいる姿に衝撃を受けました。それは自分の中で10年も経つとある程度型ができていて、といった勝手な固定観念から来ていたのだと思います。今回授業準備にご一緒させていただいたことで、私も10年20年経っても学び続け、授業準備に時間と労力を惜しまず、変化を楽しむことのできる教員を目指していきたいと強く思いました。

② 生徒のサイン

今回が大学生活を通して、初めて中学生と関

わる機会であったということもあり、休み時間の生徒との関わりには終始緊張していました。しかし、「少し笑顔でいるだけで生徒は寄ってくるから、緊張しなくても大丈夫だよ。」という言葉を生徒からいただき、笑顔を意識していると次々と生徒が話しかけてくれるようになりました。

しかし、授業になると笑顔で待っているだけでは、中学生になるとわからないことへの羞恥心が出るのか、わからないことがあっても、なかなか聞いてこようとはしませんでした。そこで①で述べた台車実験のまよめの授業に参加したときに、生徒が鉛筆の動きを止めたり、チラッとこっちを見たり、そういった小さなサインを逃さずに自分からフランクに近づいていくことを心がけました。すると「ここまで出来たけどここからはどうしたらよいの?」と心を開いて質問してくれました。一見、やる気のないように見える生徒も、やり方を教えるだけで黙々と取り組む姿勢に変わりました。このことから、わからないことを素直に表せない中学生の小さなサインを逃さず自分から近づいていくことの大切さを学びました。

また、現場の理科の先生と行動を共にし、お手伝いをさせていただくことで、理科室の整理など、授業以外の理科教師としての仕事を知ることができました。1ヶ月後から始まる教育実習ではこれらの経験を活かし、より実りのあるものになるよう頑張ります。貴重な経験をありがとうございました。

10. 生徒目線、教師目線

数理・物理学科 3年 大工原 史晃

私は5月から7月の間に土沢中学校で放課後学習会のボランティア活動に参加しました。活動時間は16:00～17:00で活動内容は数学のプリントの解説と採点でした。

今回このボランティア活動に参加してみて生徒としてではなく、教える側の立場として実際の教育の現場で感じたことや分かったことが3つありました。

まず初めに感じたことは、生徒たちが思っていたよりも元気がいいということです。私が参加した学年が1年生ということもあったかもしれませんが、とにかく元気でわからないところがあればすぐに「ここがわからないです！教えてください！」と近寄り、質問してきてくれました。私自身が中学生のときはそんなことを感じたことはなかったのですが、教える側の立場からしたら元気がいいように感じるものなのかもしれません。立場が変わると感じ取れる雰囲気というものが変わってくるのだなと思いました。実際に中学校にボランティア活動として来ていなければ、この雰囲気を体感することはできなかったと思います。

2つ目に感じたことは、生徒一人ひとりの習熟度の違いが大きいということです。当たり前のことかもしれませんが、それぞれの生徒のプリントの進み具合を見ていても、やはりどんどん解いていく生徒と手が止まってしまっている生徒がいました。このことは同じ数学の授業を受けていても授業についていけない生徒と授業についていけない生徒がいるということです。それぞれ得意不得意はあると思いますが、授業についていけない生徒に対してどのようなケアをしていくかが大事になっていくだろうと思いました。そのような点から、放課後に補習をするのは対策として効果があるように感じました。特に授業で習ったことをもう一度丁寧に教えてもらえる機会というのは生徒にとってプラスになる時間だと思いました。教師として生徒の個々の理解度を把握し、生徒一人ひとりに対応していく必要があると思いました。

3つ目に感じたことは、教えることの難しさです。生徒に理解してもらうには私自身がただその問題に対して理解しているだけでは足りないということを痛感しました。自分自身が理解

していても生徒に伝わらなければ意味がありません。そこで生徒それぞれに対してわかりやすく説明するには、語彙力や工夫が必要だと感じました。生徒目線でどのように教えれば理解してもらえるのか考える必要があると思いました。具体的には、日常生活の中から数学の問題に話を持っていくなど身近なものを例にして考えさせるとわかってくれるが多かったように感じました。そのような点から教師として教えるときには授業の中にユニークな工夫が必要だと思いました。

今回この学校ボランティアに参加して中学校の雰囲気や生徒の現状を実際に見たり感じたりすることで、教えていく上でどのような工夫が必要なのか考えさせられました。また、立場が変わることによって今まで見えていなかった部分も見えてきて勉強になりました。この経験を教師を目指す上で活かしていきたいと思います。

11. 学習する環境の設計

数理・物理学科 3年 永井 雄大

私は5月から7月の間の3ヶ月の中で計6回、土沢中学校にて学校ボランティアに参加しました。主な活動としては数学が苦手な生徒を対象とした放課後学習会において、生徒がプリント学習の中で躓いたところや分からない箇所の学習のサポートを行いました。

今回の放課後学習会では指定された問題を解いて丸つけをするということ以外に取り決めがなかったため、日によって様々な学習スタイルをとる事になりました。それによって、生徒たちの勉強に対する取り組み方や集中度が異なると感じる事ができたので、印象深かったです。

まず1つ目のスタイルでは大学生1人に対して生徒3～4人といった人数比でグループごと

に学習を行いました。少人数でさらに机を向かい合せてしていたこともあり、一番集中してプリントに取り組めたのではないかと感じました。大学生側からしても生徒一人ひとりの様子がはっきりと分かります。なので、困って手が止まっていた場合に声をかけサポートにまわれ、丁寧に対応することが出来ました。ただ、グループごとに学習していたことにより、他のグループの生徒とは一切関わる機会もなく、学習会が終わってしまいました。そのため幅広く生徒をみるという点に関しては上手いかなかったという印象を受けました。

2つ目のスタイルは大学生の人数が少なかったこともあり、学年別の教室で席の指定もなく大きく輪の形になって勉強を行いました。このとき、私は1年生の教室を担当しました。このスタイルは生徒間の距離が近いこともあって、生徒同士でお互いに考えを教え合う様子が見受けられました。大学生に気軽に質問しやすい空気が作れたという良い点はありました。しかし、どうしても仲のいい生徒同士で座り、関係のない話で盛り上がって騒々しくなってしまうたり、集中力がきれて途中で諦めたりする場面がありました。それにより生徒に対して幾度か注意や勉強を促す事が必要な環境になってしまいました。そのため、このスタイルは生徒にとってあまりいい環境とは言えなかっただろうと感じました。

3つ目のスタイルは各学年の人数が少なかったこともあり、全学年合同で一つの教室で学習会が行われました。3年生に関しては、分からない問題があっても「〇〇先生、教えて」と土沢中学校の先生に教えてもらいました。そのことについて考えた結果、指導の仕方はあるとしても、一番大きく占めているのは信頼のされ方かと感じました。信頼されるようになるためには、もっと生徒に対してこちらから寄り添い、生徒にとって一番適切な距離感を掴むことが重要かと感じました。生徒との会話があるかないかで、その後の勉強への姿勢が違うなど

実感したからです。今回の学習スタイルのように距離が近い分、生徒とうち解け合い、その後の学習につながるものもあるのだと新しい視点が発見出来ました。

今回の学校ボランティアを通じて、学習する環境を教師側が設計するにあたって生徒の人数、生徒同士でお互い考えてのディスカッションを狙いとする学習目的といった様々なことが学べた貴重な機会となりました。また、ただ教えるだけではなく短時間の中でどれだけ生徒に寄り添い指導していけばいいか新たな発見もありました。この3ヶ月で学んだ事を忘れずに次に活かしていきたいと感じました。

1.2. 理科教員の苦勞

数理・物理学科 3年 柳澤 貴大

私は土沢中学校で毎週水曜日に理科の授業の学校ボランティアをやらせていただきました。具体的な活動内容は、授業中に生徒が問題を解く際のサポート、実験の補佐、理科室の片付け、小テストの丸付けでした。

この約3ヶ月の活動から理科の教員は他の教科以上に授業までの準備が大変だということを感じました。

まず、今回の活動では2週間に1回ほどのペースで理科室の片づけをしました。基本的に生徒が使った器具は実験終了時に生徒が片付けているので問題ありませんが、先生が実験の説明のために使った実験器具は教卓に置いたままになっているので、それらの片付けや整理をしていくという作業が中心でした。最初の内はどこに何があるかわからず、片付ける場所を探すのも一苦勞でしたが、何回か理科室の整理を経験することで、よく使う実験器具の場所は覚えていくことができました。担当してくださった先生も土沢中学校に来たときは、ちょうど前の理科の先生と入れ替わりになってしまったため、

どこに何があるのかがまったくわからず、とても大変だったというお話も聞きました。このような苦労があるのは理科の先生ならではのようです。また、片付けのみではなく実験の準備も理科の先生の仕事であるため、授業以外の仕事がとても多く理科の先生の大変さを実感しました。さらに、実験をする際にも先生は神経を使う必要があります。活動期間中に実験の補佐をやったことは何度かありましたが、どの実験でも生徒の動きは注意して見ておかないと何があるかわからないということを実感しました。火を使う実験では当然危険があるということは理解していましたが、校舎から出て実験で使う花を採取するというときには、毛虫などの害虫を見つけたらそこに近づかないように伝える必要があります、電流の実験では誤った使い方をすれば機器を壊してしまうため、生徒の一举一動に対して常に注意する必要があるととても大変でした。

理科室での活動だけではなく、教室での授業に行き練習問題をやっている際にわからない生徒のサポートも行いました。これをやらせていただくことで、生徒が間違えるパターンはほとんど同じような形だということに気づくことができました。難しい問題で生徒が間違えてしまうというのはわかっていたのですが、途中の式までも同じように間違えているというのは勉強になりました。

その他にも実際の教育現場で働いていらっしゃる先生の授業を見ることで、自分の模擬授業には何が足りないのかを知ることができたように感じます。特によくお手伝いをさせていただいた理科の先生の授業では、導入を先週の復習や今学んでいることと世間の物事とのつながりを話すために多く時間を使っていることや、授業全体で使う板書の量を黒板1枚分にまとめていることに驚きました。私が模擬授業をする際にはどうしても教科書を進めるということに必死になってしまい、教科書の内容から発展した部分はそこまで重視していませんでしたが、

この先生の授業ではその発展的な話もあり、生徒としては非常に興味を持てる内容なのではないかと思いました。このような授業を展開していけるのはもちろん今までの経験もあるのだと思いますが、それ以上に教材研究や世間で注目されていることを調べ、授業に生かしているのだろうなと感じました。

このように理科の先生は授業のない時でも理科室を片付けたり、授業で使えるネタを探したりと大変なことは多いということを感じました。しかし、それ以上に生徒に「理科を好きになってほしい」「得意になってもらいたい」という熱意を感じることができて、私にとってとても良い経験になったと思っております。

最後になりましたが、現場でしか体験できない素晴らしい経験をさせていただいた土沢中学校の先生方に深く感謝いたします。

13. 生徒と接していく上での 容姿の大切さ

数理・物理学科 3年 佐々木 一樹

私は土沢中学校へ毎週火曜日の1時間目に行き、3年生の数学の授業補助に入らせていただいた。授業補助では主に授業中、寝ている生徒や友達と喋っていたり、遊んでいたりする生徒を注意するなどの生徒指導や、授業中の質問に対応するなどの学習補助を行った。また、授業が終わった後、机をきれいに並べ直したり先生の使う教材や生徒から回収したノートやドリルなどを職員室へ持っていったりするようなことも行った。

そのような体験の中で今回、生徒とのコミュニケーションを深めていくうえで、ビジュアルがいかに大事かを体験した。

まず、1回目の授業で前髪を下ろしマスクをして顔の面積をなるべく狭くして授業補助に入った。すると、生徒は誰1人として目を合わせてくれることはなかった。そこで2回目の授

業ではマスクを外し、髭を剃り授業補助に入った。すると、生徒は教室に入ってきて「おはよう！」と話しかけてきてくれた。また、授業中分からないことがあると視線を送ってきてくれて「分からない」と質問してきてくれた。しかし、3回目の授業で、髭をはやして授業補助に入ると授業中、質問をしにくる生徒はいなかった。また、挨拶をしにくる生徒もいなかった。それどころか近くへ行くと嫌な顔をする生徒や、チョロチョロこちらを見て嫌そうにする生徒もいた。そこで4回目の授業でもう1度髭を剃って授業補助に入った。すると、質問がある生徒はまた声をかけてきてくれた。5回目、再びマスクをして、前髪を下ろし授業補助に入ると誰もこちらを見ようとはしなかった。そして6回目以降は毎回マスクをとり、髭をそって授業補助に入った。すると、それからは分からないことがあると質問してきてくれた。

これは私の推測だが、マスクしたり、髭をはやしていたりするとき、中学生から見た私は怖かったのだと思う。また、それによって警戒心が生まれ、話かけるどころか見向きもしなかったのだと私は考える。また、髭などは生徒に不潔な印象を与え、あまり近寄ってきてほしくないようにも見えた。つまり、生徒と接していくうえで清潔感も重要であるということが分かった。これらのことから、中学生とコミュニケーションをとっていくうえで、いかに容姿が大切かを実感することが出来た。また、教師とは教えることだけが大切なのではなく、生徒のお手本となるような事を外面的な事からしっかりとしていかなければいけないという事も分かった。

将来教師になったら清潔感を大切に、あまり生徒から警戒されないように、明るく振舞っていかなければいけないと思った。また、こうしたほんの少しのことで生徒が質問できなくなり、学習活動を阻害してしまう可能性があることも分かったので、やはり見た目は大切なのだという事を強く実感した。今回の体験を生かして、これからは身だしなみにも気を使って教育

の場に立っていききたいと思う。

1 4. 教師の仕事・教え方の工夫

数理・物理学科 3年 高橋 雄亮

今回、私は5月から7月の約3ヶ月間にかけて、平塚市立の土沢中学校で、学校ボランティアに参加させてもらいました。今回でボランティアに参加させてもらうのは5期目でした。活動日は基本的に毎週月曜日の5時間目と6時間目の理科と、ほぼ月に2回行われた放課後補習会(数学)、それと毎週水曜日の2時間目の1年生の数学、3時間目の理科に参加しました。

数学の授業では、授業中に行われる練習問題で、わからない生徒に教える授業補助等を行いました。期間中に行われた内容が「正負の数」～「文字の式」でした。

理科では授業のサポート(主に生徒のプリント演習でのわからないところのアドバイス等)や実験室の清掃や授業見学等を行いました。

今回の学校ボランティアの活動では、以前に行った際には経験できなかった体験等を中学校の先生から多くさせてもらいました。また、今年度から私は大学の授業で、模擬授業をする機会が増えましたので、中学の授業において、先生たちの工夫の仕方を多く学ばせていただきました。また、現在、生徒がどういった部分でつまづいているかも知ることができました。今回はこの3つのテーマについて、書いていきたいと思います。

上記にも書きましたが、今回、以前には経験できなかった体験を多くさせてもらいました。生徒が朝行った小テストの採点から、数学の授業のノートチェック、休み期間に行う宿題作成等、普段の生活や大学の授業等では体験できないものばかりで、すごく充実した3ヶ月となりました。また、ただやらせてもらっただけでなく、やっていくうえでのポイント、コツを教え

ていただき、自分にとって、これはとてもプラスとなりました。たとえば、プリント制作する際には、生徒にとってどう作ると見やすくなるのか、などと言ったところです。学校の授業では、こういった点が教えてもらう機会が少ないため、良い勉強となりました。

授業の方にも多く参加させていただき、1番印象に思ったのが、自分が思っている教え方では一部の生徒には通用しないときがあるということです。というのは、一般的に教え方では、基礎の基礎(小学校の算数や全学年の知識など)をわかっていない生徒には通用しないということです。では、誰でもわかるように指導するにはどうすればいいか?全部の答えはまだわかりませんが、ヒントは中学校の工夫された授業を通して、感じることができました。また、自分とは違った視点が多く存在するとわかったと同時に、それをもっと勉強したいとも思いました。

また、今年度から放課後の数学の補習会にも参加させていただき、来た生徒一人ひとりを見ることができました。そうした中で、いろいろなことが見えてきました。根本的にわかっていない生徒、計算ミスをよくする生徒、基礎はわかっていても、それを応用することができない生徒、などと様々な問題があることを知りました。また、どこが苦手視されているのかもわかりました。今後教えていくうえで一人ひとりそういった問題を解決できるような教師になっていきたいと思いました。

まだまだ自分の中でやらなきゃいけない、知らなければいけない課題などが多くあったボランティアになりました。また、時間があり次第、積極的に参加していきたいと思います。土沢中学校の先生方、今回も本当にありがとうございました。

15. 教師であるということは

情報科学科 3年 大島 清仁

私は5月から7月の間、毎週月、水、木、金曜日のうち週3日間、土沢中学校のボランティアに参加しました。活動内容としては、月曜日は放課後の数学の補習を行い、水曜日、木曜日は技術・家庭科、理科の授業見学や授業の補助を行いました。また、校外学習などで授業の無い日と金曜日は中学校のホームページの更新作業を行い、特に何もすることが無いときは、PCルームの掃除や、写真など掲示物の掲示を行い、様々なことに携わってきました。

今まで多くの生徒たちと接する機会がなく、先生という立場で生徒と接したいという気持ちが大きくなる体験となりました。

まず授業の補助では、理科の授業を見学したことがあり、プリントを解く時間でした。すらすら解答できている生徒と、そうでない生徒との差が少しあったと思いました。早く解き終わってしまった生徒が、わからない問題がある生徒に教えていて感心しました。寝ている生徒もいましたが、生徒にわからない問題を尋ねられたとき、ヒントを与えると、すぐに解くことが出来ていました。生徒が友達同士で教えあって問題を解いている印象が強く、あまり“わからない”と質問してくれる生徒は少なかったように思います。それでも、躓いている生徒がいたら、積極的にフォローをしました。中でも、自分が中学生のときに習っていない事を聞かれたときに、少し戸惑ってしまいました。数学が専門ですが、自分が習った理科の内容とは少し異なっている事に気づかされました。先生であるということは、生徒からの質問に答えなければならないくて、このように予想もしていなかった質問を聞かれるかもしれないということに気付かされました。

次に印象に残っているのは、放課後の補習で、生徒が数学のプリントを解いているときで

した。3人の生徒を担当し、担当した生徒たちは問題をすらすら解けていました。時々わからない問題があり、ヒントを与えても理解できない問題だったので、教えるのに苦労しました。時間内にプリントを終わらせることができ、答え合わせをしたらほとんど正解していましたが、やはり括弧を付け忘れるなどの単純なミスがありました。注意したら、「わかりました」とみんな素直で、さらには終わった後に「ありがとうございました」と言ってもらえて、感動しました。

ボランティアに行った回数が増えるにつれ、何度か同じ生徒に会うことがあり、名前を覚えてもらえました。そこでふと“もし自分が教師であれば、生徒と友達のように接してはいけなく、あくまでも生徒と教師である”ということに気づきました。

今回のボランティアを通して、気づかされたことが多くあり、後期も参加できれば、参加したいと思いました。自分が中学生だったとき、実際に教師の目線に立ったときでは、自分の思っていた教師のイメージががらりと変わりました。この経験を活かし、これからの勉強に励んでいきたいと思いました。

16. 教え方は十人十色

化学科 3年 福本 健志

私の活動先は去年と同じ土沢中学校で、今回の主な活動内容は授業補助であった。

この授業補助は座学と実験の二つに分類される。座学の授業補助は生徒が演習や問題に取り組む際に、わからないことや質問があれば教えるといった内容だ。また、中にはその教科が苦手な解答に苦戦する生徒がおり、そういった子を優先的にサポートする。その一方、実験での授業補助は座学のときの活動に加え、実験過程を見守る事や器具・装置の誤った使い方による

事故防止の為に監視、円滑で安全な実験方法のためのアドバイスなどである。座学よりも実験で学ぶことの方が記憶に残りやすいという反面、危険が付きまとうこともあり、より一層の緊張感と責任感を持って授業支援に取り組まなければならない。

今回のレポートの趣旨は、前回とは異なり教えるべき対象である「生徒」ではなく、物事を相手に伝える側である「教師」にその視点を向けた。

私が教師に着目した理由は、「自身が一番悩んでいること」の解決を行うためである。私が悩んでいたことは、模擬授業の内容を考えていたときに発生した疑問で、生徒に対し「どこまで本当のことを話すか」「どこまで詳しく話すか」「どのようにして物事を伝えるか」といったことである。

中学校や高等学校で学ぶ内容というのは、生徒に理解しやすくするために具体性を持たせている。例えば、原子の構造について電子は原子核の周りを回っているという内容がある。これは原子モデルを用いた説明であり、具体的な概念としてイメージしやすく知識の定着にも効果的である。だが、現在の量子化学の世界でこれは間違いであり、電子は電子雲上に存在し確定した点と速度を持つものではなく、この存在は存在確率として示される。このようなことに対し、どこまで詳しく話すかということについて私は悩んだ。この問いに対し、私はこの活動で解を得ることができた。

私の結論として、専門的な知識を伝えることが重要ではないことに気がついた。確かに本当のことを伝えることは重要かもしれないが、生徒たちにとって一番重要なのは、「今の学習をどのようにして理解するか」である。また、どの程度詳しく話すかという事柄についても同様である。抽象的な内容である専門的な話をしてしまい、生徒の理解に混乱を引き起こすことは本意ではない。その物事に対して「より深い内容の説明」をするのでなく、「理解しやすくさ

せるための小話」の方が重要である。

物事を伝える能力は教師にとって必要不可欠なものである。私が先生方の教え方を見て、これは物事を伝える上で重要だと感じたことが三つある。一つ目は、一見関係のない話から、教えた事柄へと話を繋げることである。これは難しい内容を教えるときほど有効で、生徒の興味を引きつつ具体性を持たせた教授法なので大変有用である。二つ目は教師の話し方、すなわちトーク力である。同じ話でも伝え方が異なると、面白い方が生徒達も興味を持って話を聞いてくれて、理解につながるのである。三つ目は身体を使った教え方である。身ぶり・手ぶりで表現をしながら話をするすることで、生徒たちの注意を引きつけ、また笑いを誘っていた。これは私の最も印象深かったものである。

17. 当たり前のことを当たり前に 思っていない

数理・物理学科 2年 綾部 裕太

私は土沢中学校で月に1,2回程度、月曜日に数学の補講授業をさせていただきました。主に1年生の補講をさせていただきましたが、最終日には1年,2年,3年合同で補講を行いました。生徒は先生が用意して下さったプリントを解き、私たち学生はその様子を見回りました。そのときに、生徒の手が止まっていたら隣に行き、何ができてないかを確認してあげて、その問題に沿った例を作り、一緒に解いて問題に慣れさせてからできなかったところを再度生徒に挑戦してもらいました。教える時間は少なかったのですが、生徒と上手くコミュニケーションをとることができました。

今回のボランティアで、多くの生徒が私たちに聞くことが恥ずかしいということを知りました。何が解らなく、どこが解っていないかも解らない生徒が多いと思い、私自身が動いて何ができていないか見ていかなければならないと思

いました。なので、見回りをして、手が止まっている生徒を見つけると、すぐ隣に行って私が確認し、教えていきました。しかし、負の引き算 $2 - (-1)$ が $2 + 1$ になるような問題で、+になることが解らないのに分配法則の計算をしていて、手が止まっている生徒を発見しました。最初は、分配法則が解らないから出来ていないのだと思い、分配法則を教えました。そして、問題を解いてもらったのですが、また出来ていなく、途中式の一つひとつ見ていくと、 $2 - (-1)$ のところが気づいたら $2 - 1$ と計算しており、負の引き算が出来てないことがわかりました。負の引き算のところを数直線で教えると、生徒は理解することができ、他の問題に取り組んでもらっても解くことができました。このように分配法則をやっているから、負の引き算が出来ると信じ込んではいけないのだと知りました。このことから、教える側が当たり前のことを当たり前に思っていないと感じました。

ボランティアで学んだことを生かして、弟に教える際にもこのくらい理解しているだろうという前提で教えていくことを止め、何が解っていないかを確認して教えてあげると、中間テストにも結果があらわれたので、私はとても嬉しかったです。教えた分だけ結果がでてくれたときの嬉しさを知り、以前よりも教師になりたいと思いました。

18. 学校における工夫と準備

化学科 2年 小倉 龍馬

今回私は、初めて学校ボランティアに参加させていただきました。主な活動内容としては、毎週水曜日の午後に、数学及び理科の授業に参加させていただきました。授業では生徒が練習問題を解く際に分からないところなどを教えるというものでした。また、先生という立場で避

難訓練も参加させていただきました。

今回の活動を通して、教科書の内容を生徒たちが理解するためには工夫して授業を展開していくことが大切だと思いました。そして、土沢中では先生と生徒のコミュニケーションがとてもよくとれていると感じました。

数学の授業では、1・3年生のクラスに参加させていただく機会が多かったです。授業のときには、先生が生徒の関心と理解を確かめるために、よく生徒に問いかけたり、黒板に問題を解かせたりと授業にあたって様々な工夫がありました。また、教科書の内容をそのまま教科書に沿って教えるのではなく、様々なパターンの問題を教えることで生徒の理解力をつける工夫をしていました。そして、生徒がきちんと理解をしているか練習問題のプリントを行い、毎回回収してチェックするなど、ひとつの授業の中に多くの工夫があると強く感じました。

生徒の授業態度は寝ている人、遊んでいる人、しゃべっている人など様々でした。しかし、その中でも先生はそのままにしないで何度も注意したり、その生徒に問題を答えさせたりと上手くコミュニケーションをとりながら授業に対しての関心を持たせる工夫もしていました。こうして、先生の問いかけに何人かの生徒が答えるようになっていたので、そのような工夫をし続けていくことで授業に積極的な生徒が増えていくのではないかと感じました。

休み時間になると、生徒とすれ違うときにいつも挨拶をしてくれます。普段から多くの先生は生徒たちに接することで、挨拶する生徒が非常に多くなったのではないかと感じました。

私はいつも生徒の立場で避難訓練をしていましたが、今回初めて先生の立場で避難訓練を行う貴重な体験をさせていただきました。生徒にどのように速く避難させるか事前に教員同士で打ち合わせをしたり、生徒に速く避難させるように声をかけたりしていました。避難訓練をスムーズに行うには、このような連携がとても必要だと感じました。

生徒が安心して学校生活を送れるようにたくさんの工夫としっかりとした準備が大切だと今回の体験で強く感じました。この事前の準備をすることでよりよい学校になっているのではないかと思います。授業をするにあたっても、準備をしておかないと上手く授業が行えないので、様々な場面で事前の準備や工夫が必要だと思いました。また、このような準備を行うためには教師と生徒だけではなく、教師同士や生徒同士でもコミュニケーションが必要不可欠であることがより一層わかることができました。

今回のボランティアに参加していなければ、このようなことに気づけなかったと思います。また機会があればボランティアに参加したいと思いました。教師になるために何事にも多くの準備が必要であると感じたので、このような体験を今後活かしていきたいと思いました。

19. 信頼関係の形成

化学科 2年 松島 花

私は、基本的に毎週水曜の1限に理科の授業のサポートをしに行っていました。作業の内容としては、実験の補助をしたり、教室で先生が説明しているとき、授業の内容でわからないところがある生徒に教えたり、寝ている生徒を注意して回ったりしました。

今回の学校ボランティアは私にとって初めての体験でした。そのため、学ぶこともたくさんありました。このレポートでは、授業サポートをしてきて、どのようなことがあり、それを通してどのようなことを学んだのかについて書いていこうと思います。

初めての学校ボランティアの日、少し緊張しながらも、楽しみにしていた私は、生徒から、立っているだけでなく働け、という言葉をかけられて驚きました。初めは、無視をしていましたが、その後すぐに、確かにつつ立っているだ

けでは意味がないと思い、生徒のその言葉から、生徒を見て回れるようになりました。私は、1回目の授業が終わって、予想していた生徒たちの反応とは違っていたけれども、これからもっと生徒たちとコミュニケーションをとっていきたいと思いました。

それからは、毎週毎週、後ろからものを言われることも多々ありましたけれど、そういった生徒への指導に付きっきりになるのではなく、みんな平等に見てあげられるように教室を回って、生徒たちに声をかけるようにしていきました。すると、だんだんと生徒たちの警戒心もとれ、授業前などにも少し会話ができるようになっていきました。そうすると、だんだんと生徒一人ひとりの性格も見えてきました。とはいっても、すべての生徒の性格を理解し、すべての生徒に、私を受け入れてもらうことはとても難しいことです。

私には、手を焼いている生徒のほかに、もう一人、気になる生徒がいました。ある日、私はその生徒が、先生に言われている練習問題をやっていなかったの、やるように言いました。その後、その生徒を見に行くのと解けていたので、私は「できるじゃん!」と言いました。でも、彼はそれが嫌だったみたいで、それから、私のことを嫌っているのが何も言われることはなくても、伝わってくるようになりました。

以上のようなことを体験して、一番学んだことは、信頼関係を築くのには時間がかかるということです。でも、信頼関係ができてきた方が、授業サポートに行くのも楽しくなることや、心を開いてない生徒とも時間をかけてでも受け入れてもらいたいと思えるようになること。また、生徒たちも、信頼関係を築けている方が、素直に先生の言葉を受け入れられることが分かり、改めて信頼関係を築くということが、とても大事なことだと思いました。

担当したクラスのみならずしっかりとした信頼関係が築けていないので、後期も機会があれば、

中学校ボランティアに行きたいと思いました。

20. ボランティアを通して 得たことと課題

生物科学科 2年 加藤 理道

私は今回初めて土沢中学校へ学校ボランティアに行かせてもらいました。毎週金曜日の2, 3時間目 (10:05 ~ 11:55) に入らせてもらいました。主な活動は理科と数学の授業補助でした。教室の後ろに立ち、おしゃべりをしている生徒に注意をしたり、手が止まっている生徒にヒントを与えて一緒に解いていったりしました。理科では一緒に実験をしたり、実験の結果からグラフをつくったり、プリントに適語を記入していく補助を行なったりしました。数学では計算確認や解き方の指導をしていきました。また、中間テストの後には生徒の解いたワークのチェックもしました。授業補助をしている時に注意したのは答えを言ってしまうことです。あくまでヒントに留めておく事で生徒自身に考えさせるようにしました。理科と数学以外にも技術の授業にも参加させてもらいました。

私は中学校の理科の教員を目指しているのですが今回の経験は非常にためになるものでした。今回のボランティアで何よりも驚いたのは、生徒の元気の良さです。先生の発問に対して敏感に反応し、授業に積極的に参加しようとする意思が感じられました。私はもっと静かというか冷ややかな感じを想像していたので、これにはとても驚かされました。また、生徒からとてもフレンドリーに話しかけてきてくれたのも印象的でした。いきなり見ず知らずの大学生が来て授業の補助をしても、「なんだこいつ」となってしまっているのではないかと不安に思っていたのですが、実際にはそのようなことはなく、分からないところがあったりすると「加藤さん、ここが

わからない。」「どうやったらいいの?」と向こうから話しかけてきてくれました。ボランティアの活動も終盤になると、授業中だけでなく、休み時間まで話しかけてきてくれる生徒もいました。私の方から生徒の緊張を解いていこうと考えていたのに、逆に私の方が生徒たちによって緊張を解いていかれたように感じました。

理科の授業の仕方も大変参考になりました。模擬授業で練習はするものの、実際どのようにやったらいいのか分からないところがありました。先生の板書は何でもかんでも書くのではなく、必要最低限のことしか書かないようにしている印象を受けました。また、要所要所で雑談というような豆知識を披露し、生徒の関心を集めていたように感じます。そして先生の「驚きが記憶に残る。勉強して驚いてください。」という言葉に感銘を受けた。生徒にとって驚きのある授業。これが目標とすべき理想の授業のひとつではないかと考えます。

教員を志すにあたって、指導力と確かな知識が課題として見えてきました。注意喚起をしにいったときうまく誘導できず、先生に迷惑をかけてしまったことがありました。また、理科の授業に出ていたため生徒が理科なら何でもいけると思われて「銀河系内で地球にもっとも近い（距離的な意味で）星は?」と聞かれ、即座には答えられませんでした。（ちなみに答えはプロキシマ・ケンタウリです。）専門の生物はもちろんですが、中学教諭を目指している身なので、化学・物理・地学にも精通しているようにこれからいっそう勉強しなくてはならないと感じました。

今回ボランティアとして実際に学校現場に赴いたことで、短い期間でしたが、先生側の視点から学校をみることができ、課題や現状など様々なものを体感できたように感じます。ありがとうございました。

2.1. 「先生」としてのコミュニケーション

生物科学科 2年 篠原 維

今回、初めて学校ボランティアに参加させていただきました。2ヶ月間、毎週水曜日の午前中に土沢中学校に行かせていただき、主に授業の補助やミニテストの答え合わせ、解答プリントの作成を行いました。また、お昼休みには鴻之巣チャレンジというミニテストの補習を行いました。

今回のボランティアを通してとても多くのことを学びましたが、特に心残りだったことが一つあります。3年生の授業に参加させていただいたとき、ある生徒がいつも授業に集中できず騒いでしまい、結果的に授業にならなくなってしまったことが何度もありました。そのとき、騒いでしまう生徒は私たちボランティアの学生にもよく話しかけてくるのですが、よい返し方ができずにそのまま話してしまうこと等があり、自分の力不足を強く感じました。

今回のボランティアではいろいろな学年・クラスに入らせていただきましたが、クラス一つ一つが少人数であることもあり、よく行くクラスの生徒とは早く打ち解けることができ嬉しかったです。しかし、それが行き過ぎて友達のようになってしまったことが良くなかったと思いました。授業中に生徒と雑談してしまうことは授業をされている先生に失礼な行為であり、反省しなくてはならないと思いました。

また数学の授業中、さりげなく集中力が切れてきた生徒に対して先生がフランクに生徒が自然と授業に入り込めるように声をかけていらっしゃいました。授業中に軽く冗談等を交えて解説やヒント等の話をするすることで、生徒の注意がしっかり授業に向くよう展開していらっしゃいました。生徒の様子を見ていると、問題演習等に集中できているだけでなく、授業を楽しんで受けているように感じました。普段騒いでしまう生徒もこうした工夫によって授業に集中でき

ていることがわかり、先生方の生徒への態度はとても勉強になり、このような授業を自分もできるようになりたいと強く思いました。

このボランティアでの経験は非常に貴重なものであり、自分の成長のためにとても役立つものだと感じています。次にボランティアに参加するときは友達感覚ではなく、「先生」として生徒とコミュニケーションを取っていきたいと思います。このような機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

2.2. 生徒とよりよい関係を築く

生物科学科 2年 滝沢 仁基

私は今回、毎週水曜日の8時30分から12時30分の間に中学校ボランティアに参加しました。初めて新しい視点で中学生と接したため、驚くことも多くありました。

まず初めに、朝会と鴻之巣タイムを見学しました。そして、1限は鴻之巣タイムで行われたテストの採点をし、2限と3限は各授業に参加しました。そのあとの昼休みに鴻之巣タイムの再テストの監督をするというものでした。

鴻之巣タイムでは多くの生徒が真剣に取り組んでおり、毎回の採点がとても楽しみでした。テストに「もう少しで解けそうだった!」「ど忘れした!」などとコメントがあるときもあり、それに合ったコメントを返すことで、生徒とコミュニケーションをとれている気がして嬉しく思いました。

理科の授業では、自分が理科教員志望ということもあり、これからの模擬授業などの参考になることばかりでした。導入のときに授業の内容に関係する身近な生活の話などをして、生徒に興味をわかせる、引き付けるにはいい方法であると思いました。また、板書について、私は一時間の授業で多くの板書を書いてしまうことがありましたが、私が見学したクラスの先生の板

書は少ない板書にポイントを押さえているように感じました。

私は主に理科と数学の授業に参加しましたが、一度だけ国語の授業に参加しました。そのときの授業が、東京の校外学習について川柳を書くというものでした。生徒にとって川柳を書くということは慣れないことなので、今までの授業以上に多くの質問が生徒から出ました。「アイスクリームを食べたことを書きたいんだけどどうしよう?」「レインボーブリッジがすごくきれいだったことを書きたいけどあまり思いつかない!」などとたくさんの声がかかり、一緒に考えました。その結果、それぞれの良い川柳が完成したのではないかと感じました。

昼休みに行われた鴻之巣タイムの再テストでは、ここがよくわからないなどの質問を受け、可能な範囲で答えました。また、再テストの後に生徒から会話をもちかけてくれて、話が盛り上がるものがしばしばありました。このときはまだ、再テストの監督をする役目を担っていたので、生徒と雑談をしていいのかと思うこともありましたが、このように生徒から話しかけてくれたときこそが最高のコミュニケーションをとることができるチャンスであると考え、監督をするのと同時に生徒とコミュニケーションをとりました。

今回の中学校ボランティアで私が主に学んだことは、生徒とのコミュニケーションのとり方です。私は生徒よりも年上なので、無意識のうちに「年下」というくくりで接することがあるかもしれないと思い、上からすぎないように心がけました。そして、ボランティアの終盤にかかると、名前を覚えてくれたり、廊下ですれ違ったときに「次はうちのクラスにおいでよ!」などと言ってくれたりなど嬉しく感じるものが多くありました。

5月から7月という短い期間でありましたが、私は教師になるうえで重要な心構えや考え方、そして生徒とコミュニケーションをとることの大切さなどをこのボランティア活動から学

ぶことができました。そして、教師という仕事は子どもの成長と一緒に見守ることができる素晴らしい職業であると再認識しました。だからこそ、私はその子どもの未来をより明るくする手伝いができる教師を目指すために、日々努力をしています。

最後に、貴重な体験をさせていただき、土沢中学校の先生方や生徒の皆様深く感謝いたします。

23. ボランティアを通して気づき、 学べたこと

生物科学科 2年 柴倉 愛理

私は5月から6月までの2ヶ月間、土沢中学校で初めて学校ボランティアに参加しました。時間は毎週水曜日の午前9時30分から12時30分までの計7回でした。活動内容として、2時間目と3時間目の時間に、理科や数学などの授業の補助、理科室の整理整頓、朝学習で行った小テストの採点、昼休みには朝学習の小テストの再テスト者の採点を行いました。

初めのうちは、緊張していて生徒に声をかけることができなかったのですが、少しずつ声をかけることができました。そして、授業を先生の立場で見るとというのは新鮮で、今まで気づけなかったことに気づくことができました。

まず、今回のボランティアを通して感じたのは、「自分の語彙力の無さ」でした。問題が解けない生徒に対して教えるときに、中学生にわかるようにそのレベルにあった説明をしなければならないところで私は語彙力が無く、生徒は説明が理解できず困ったり、余計に混乱してしまったりしてしまい、改めて生徒へ教えることの難しさを感じました。

そして、今回重要だと感じたのは「生徒とコミュニケーションをとること」です。今回のボランティアは週1の計7回という少ないもので

あったため、生徒と関わる機会が少なかったのですが、昼休み中の再テスト者の採点時に生徒と話す機会があり、様々な生徒と話すことができました。そのときに話した生徒が授業中に私が近くにいると、教えてほしいと自ら声をかけてくれました。このときとてもうれしかったです。教師になったときに生徒とのコミュニケーションはとても大事になってくと思います。実際、先生方の授業を見ていると生徒に問いかけ等をして、積極的に生徒とコミュニケーションをとっているほうが、生徒も授業に関心を持ちながら授業を受けていました。そして、授業だけではなく、休み時間でも生徒に対して声かけをしている先生には、生徒も楽しそうに話していました。生徒と先生の間にいい関係をつくっていくには、やはり生徒と積極的に話していくこと、そしてそのためのコミュニケーション力が必要であると感じました。

今回ボランティアを通して貴重な経験をすることができました。今回気づくことができたことを忘れず、自分に足りないと感じた点をこれからしっかりと改善していきたいと思います。そして、今後も先生の立場に立つことで気づけることを学んでいきたいと思います。

最後に、土沢中学校の皆様、貴重な経験と時間をありがとうございました。今後もボランティアに参加していきたいと考えていますので、その際はよろしく願いいたします。

24. 集団授業の難しさ

総合理科学プログラム 2年 石山 実玖

私は5月から7月にかけて土沢中学校で月曜日の放課後学習会と、木曜日の授業補佐を数回ずつさせていただきました。放課後学習会では、用意された数学のプリントに取り組んでいる2、3年生に分からないところの指導や丸付けを行いました。授業補佐では主に、1年生の数学の

授業に入らせていただき、先生の授業展開を見させていただいたとともに問題演習の際には分からない生徒の手助けを行いました。

放課後学習会と授業補佐ではやったことは全く違いますが、共通して感じたことがありました。それは数学の得意な生徒と苦手な生徒の違いです。得意な生徒は積極的な人が多く、分からないことがあると聞いてきてくれます。それに対して苦手な生徒は少し控えめで、分からないことがあってもなかなか分からないと言えずにいることが多いように思いました。今回のボランティアでも、演習の時間なのに解くのをやめてお喋りなど違うことをし始めたので、集中力が切れてしまったのではないかと考えて見ていると実際は問題がよく分からずにいたという場面が何度かありました。また、分かる生徒は答えが分かるとすぐに声に出してしまうことが多いように思いました。その分かる生徒に合わせて授業を進めていくと分からない生徒はただひたすらに板書を写すだけで、授業に参加できなくなる。演習の際にもどんどん答えが言われてしまうので、自分で考えることもなく、答えを写しているだけになっている生徒が見受けられました。

机間指導や放課後学習会のような場面ではこちらから声をかけていくことで解決できると思いますが、様々な生徒がいる実際の集団での授業ではそうはいかないことが多いと思います。分からない生徒に合わせて授業を行うと分かる生徒は退屈してしまうし、分かる生徒に合わせて授業を行うと分からない生徒は置いていかれてしまう。様々な生徒がいるなかでどこに基準を合わせて進めていくかというのが、集団授業を行う上での難しい点だなと感じました。分からない生徒のために簡単にして教えるのではなく、その生徒が分からない原因が何なのかを考え、それに応じた授業を行っていくことで、みんなが同じくらいのレベルとなれるのがいいなと思いました。

授業を見させていただいて一番印象的だった

のは、授業が会話のように進められていたことです。たくさんの発問により、先生と生徒たちがきちんと言葉のキャッチボールをしている状態だったので、みんなが参加出来ており、みんながやる気を持って臨んでいた授業でした。

そういうように数学の好きな生徒も嫌いな生徒も、得意な生徒も苦手な生徒も全ての生徒が参加できる授業ができる先生になりたいと思いました。

今回、中学校でボランティア活動をさせていただいたことは、教師を目指している私にとって多くのものを学ぶことができ、大変意味深いものとなりました。この経験を生かして教師への道を邁進していきたいと思います。

土沢中学校・秦野曽屋高等学校

25. 生徒の表情からわかること

情報科学科 4年 中尾 真穂

今回は土沢中学校と曽屋高校へ学校ボランティアに行き、土沢中学校では5月12・19日と6月16日の3日間、16:00～17:00に2年生と3年生の放課後ボランティアとして数学の補習を行いました。また曽屋高校では毎週火曜日の15:40～16:40に1年生と2年生の数学の補習を行いました。

今回は今までとは異なり授業中のボランティアというわけではなく、どちらの学校も放課後の活動ということで、生徒の実態がどのようになっているかを見ることに重点を置き、コミュニケーションを図りながら活動を行いました。

以前にも土沢中学校ではお世話になっていましたが、今回は授業に入るのではなく、どちらかといえば塾のような形式で行いました。その分、授業では見ることのできなかった生徒の一面をよく見ることができ、一人ひとりの性格ややる気、またどのような場面で手が止まりやすいのかを見ることができました。さらにコミュニケーションをとることも授業ではなかなかしにくいところですが、今回はそれぞれのペースで行える分、質問が出やすく、それに対して会話を膨らませることができたのでとてもいい経験になりました。生徒の中には本来は誰よりもはやく問題を解くことができる生徒がいたのですが、今回思った以上に苦戦してしまったようで、どんどん焦りが見えました。このときにどのように声をかけるべきか、むしろ声をかけずに見守っておくべきなのかがとても悩むところでした。

また、今回初めて曽屋高校にお世話になりました。人数的には生徒3名、テスト前に集中して15名程度での活動となりましたが、自分が

勉強したいところを中心に行わせ、わからないことがあったら質問するという流れで行いました。私は過去に小学校・中学校の学校ボランティアを行ってきましたが、それらと比較したときに高校生は自主的に活動ができると感じました。また、分からない点があれば、まずは自力で取り組み、それから質問するという様子でした。さらには、2・3年後には大学受験を控えているということから、理系・文系の内容などの話もしました。しかしながら、2年の生徒が「1年生の内容は覚えていないと駄目なのか」という質問や1年の生徒も同様に「テスト終わっても覚えていた方がいいのか」という質問には正直なんとも言えない虚しさがありました。

様々な学校ボランティアの経験を通じて、校種によって生徒の表情や表現力などには多少の違いはありましたが、それでも生徒をしっかりと考えていれば、今どのような心境で問題に取り組んでいるのか、面倒だと感じているのか、それとも楽しいのかなど純粋に伝わってくるものだと感じました。だからこそ、普段から生徒とよく関わり、決して上辺だけで判断することなく、生徒一人ひとりの表情や会話などから本質をしっかりと見ていく必要があるのではないかと思います。また、問題に対して質問をされた際にも、ただ解法をすぐに教えてしまうのではなく、生徒自身の力を最大限に引き出し、生徒に問題に対する意欲と自信をつけさせていくことができるような指導をしていけるような技量をつけていきたいと思いました。授業力向上だけでなく、生徒のちょっとした変化を見逃さずに気づいていくことのできる教師になりたいという気持ちになることができました。

26. 理想と現実のギャップ

情報科学科 4年 丸山 彩恵子

今回は、土沢中学校の放課後学習の活動と曾屋高校の曾屋塾に参加させていただきました。土沢中学校では3年生を中心に数学の学習支援を2回させていただき、2年前に教えていた頃は1年生だった生徒たちの変化に感動しました。秦野曾屋高校では5月の末から毎週火曜日と木曜日に、曾屋塾の講師として活動させていただきました。曾屋塾は有志の生徒が放課後に15:45～16:45の1時間、自主的な学びの支援を目指し活動してきました。学年も科目も異なるニーズに応えるのが大半でした。今期の活動ではそれぞれの学校で感動と課題に直面しました。

今回の活動では、私の理想を実現するためにはなかなか難しいと感じました。そのために、より経験や知識を積まなくてはならないと机上の空論などではなく、切実に体験させていただきました。また、成長の裏には努力して評価される方法は1通りではないこと、同時に気持を育てることの大切さについて勉強させていただきました。

【土沢中学校 ～評価の在り方～】

土沢中学校では1年生のときに土曜日補習で一緒に勉強していた生徒が、友人から「〇〇は数学得意じゃん！」と言われている姿がありました。1年生のときは「数学好きじゃない」などと言っていた生徒がサラサラと手を動かして問題に取り組み、さらに友人に教えている姿に成長を感じて口が緩んでしまいました。しかし、その反面“出来る生徒”への嫉妬のような言葉も聞こえてきました。数学が分かるようになって欲しいという思いと、それによって生じてしまう歪みについて、どのように指導すべきか考えさせられました。1年生から3年生の今に至るまでの努力が、他の人には疎まれてしまう。本来なら、一緒に変化を喜んだり、競つ

て向上しようとしたりと切磋琢磨する関係を築いて欲しいところでしたが、裏目に出てしまいました。おそらく、こういったことは中学校に限らず何処でも起こりうる課題で、ここには数学だけに留まらず、道徳的教育の必要性も同時に含まれているのではないかという問題にぶつかりました。

【曾屋高校 ～理想はあくまで理想～】

曾屋塾では初めて5人以上の人数を対象にすることになり、緊張と不安でいっぱいでしたが生徒に「先生、先生！これ分かんない！」という言葉で迎え入れていただきました。このように始まった活動の中で、最も留意したことは「個々に合わせた対応」ということでした。1時間の中で、全体に等しく関わり、必要な支援を行うことは非常に難しいものでした。有志の生徒とはいえ、クラスはもちろん学年、普段一緒にいるグループも違う生徒は質問出来る生徒と、そうでない生徒が自由に座っている状態でした。おそらく1クラスを縮尺したような状態でした。教室内の歩き方や立ち位置を考え、質問を進んでする生徒からは少し距離があっても声をかけてくれるので、手を挙げるのが難しい生徒の後ろを回るようにしました。反対に手を挙げられる生徒との距離ができてしまったように思いましたが、曾屋塾の前後には笑顔で話しかけてくれ、その笑顔に“個々に合った対応”と“自主性の促進”について考えさせられました。“どの生徒にも同じように、必要とされることに応えたい。自分から勉強しに来ている気持を育てたい。”自分のやっている事と、ずっと思い描いていた理想にギャップを感じ自分の技術の未熟さを痛感しました。

今期までの活動で毎回新しいことを見つけ、考えさせられてきました。しかし、決定的に教師としての欠点にぶつかっている今、残りの半期間をかけて埋めていきたいと思っています。